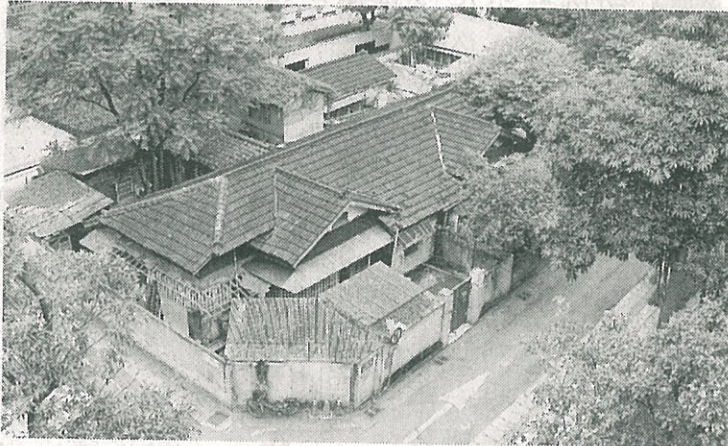


【台北＝河崎真澄】台北市内の大安区錦安里に戦前から残る日本家屋十二戸が「取り壊しの危機」に揺れている。環境保全を理由に近隣住民が進めていた保存運動で二戸がようやく「歴史的建造物」に認められたものの、残る十戸は保存のめどが立たず、押し寄せるマンション建設の土地買収攻勢も強まった。日本家屋に住み続ける住民の高齢化も進んでいる。

「なに、日本人？ 出ていってくれ。撮影もお断りだ」。錦安里の日本家屋に住む八十歳代のご婦人の鍾さんの自宅を訪ねたところ、長男だといふ六十歳前後の男性が出てきて追い返された。

鍾さんは、戦前の総督府林務局、戦後は台湾の林務当局に勤めた台湾人の主人(故人)とこの住宅に住んできた。以前、鍾さんに取材した際、「和式の木造住宅はコンクリート住宅と違っ

日本家屋 取り壊し危機



台北市内の大安区錦安里(日本統治時代は「錦町」)に残る日本家屋(河崎真澄撮影)

住民高齢化
保存めど立たず
マンション建設の波

て夏は涼しく、冬は暖かい。ずっとこの家に住み続けたい」と話していた。

しかし、関係者によらんと、マンション建設への土地譲渡に家族が興味を示し、保存運動と一線を

が進めば日本家屋保存はもはや難しい。国民党権が反日教育を行った戦後世代には「日本アレルギー」もある。

近隣住民たちはそうした感情にも配慮して、日本家屋の庭に残る貴重な樹木の「台湾油杉」の保全と環境保護を掲げた「台湾油杉社区発展協会」を発足させた。同協会の劉豊豪主任委員は「この土地の歴史は現在の私たちの宝。植民時代の問題や民族意識などにかかわらず、すべての文物を保護し語り継ぎたい」と話し、貴重な「歴史の証言者」でもある日本家屋を時代を超えて保存することの意義を強調している。

台北



かつて日本統治下の台北に住んでいた日本人が、当時、日本人街だった青田街(旧昭和町)の住宅地図を再現させた。記憶をたどりながらの膨大な作業となったが、参加者は「日本文化を大事にしてくれる(台湾人の)気持ちがある」と話している。

「歴史ある古木が無残な姿をさらしている。日本人が作った古き良き街を歴史に残したい」

昭和町と縁のあった人たちが約百四十人と連絡がとれた。「昭和町会」の結成も決まり、往時の地図作りが始まった。

名前・職業詳細に記す

作業は台湾から届いたこの一通の手紙から始まった。手紙を受け取ったのは鈴木貴太郎元首相の孫娘にあたる厚東洋子さん。旧昭和町の保存を目指す台湾人が知人を介して、当時の情報を提供してくれないかと協力を求めてきたのだった。

日本人街の住宅地図再現

しかし記憶はあまいで作業は難航した。地図のたたき台を作った方丸研二さんは「電話やメールで細部をつめ、現地にも足を運びました」と話す。

確認作業を重ねた末、昨年十二月、ようやく完成にこぎ着けた。出来上がった住宅地図は戸数だけでなく、住民の名前・職業などが詳細に記されている。その報告会が今月中旬、都内で開かれ、台湾で保存運動に携わる人たちも駆けつけた。

そのうちの一人、台湾中央研究院研究員の黄智慧さんはこう話す。「心通う日台間の交流の場として、保存を台北市に求め続けていきたい。植民地時代の残影を消し去るのではなく、台湾の軌跡として歴史に残すことは、戦後世代の責任だと思ふ」(長谷川周人)